**聖霊降臨節第10主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年7月21日**

**「心を開いて」**

**詩編19編8～11節**

 **19:8 主の律法は完全で、魂を生き返らせ／主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。**

 **19:9 主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え／主の戒めは清らかで、目に光を与える。**

 **19:10 主への畏れは清く、いつまでも続き／主の裁きはまことで、ことごとく正しい。**

 **19:11 金にまさり、多くの純金にまさって望ましく／蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い。**

**使徒言行録16章11～15節**

**16:11 わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、**

 **16:12 そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。**

 **16:13 安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。**

 **16:14 ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。**

 **16:15 そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だとお思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。**

1.

**私たちは「心を開く」とか、あるいはその反対の「心を閉ざす」という表現を日常的に使います。「私はあの人にだけは心を開くことができる」とか「あの人は誰に対しても心を閉ざしてしまっている」というふうにです。誰にも言えない本音を打ち明けるのが「心を開く」であり、その反対が「心を閉ざす」です。**

**「心を開く」「心を閉ざす」考えてみれば不思議な表現だと思います。まるで私たちの心に扉があってその心の扉を私たちが時と場合に応じて自在に開けたり閉じたりできる、何かそういうものがイメージできます。実際にはそんな心の扉は目には見えないのですが、改めて「心」というものは不思議なものであると思わせられるのです。**

**聖書では、特に新約聖書で「心」と訳されているギリシャ語の単語には心臓とか魂という意味があります。「心」が肉体的・精神的・霊的な中心であり、神様から与えられた命が宿っているのです。そして「心」を聖書事典で調べていますと「重要なことは、心は「神と人との出会いを生ずる場所」である。しかも、心を閉じまた開くという両様（りょうよう）の関係においては人は神との関係を問われ、神に出会う。」と記されているのです。私たちの心は神様と出会う場所であり、その出会いは私たちが神様に心を開くことで起こり、反対に心を閉ざすことで神様に頑なになり背いてしまうということです。まさにその通りだなと思います。**

**心を開き今まさに神様との出会いをするリディアという一人の女性の姿が本日私たちに与えられた聖書箇所である使徒言行録に出てきます。共に御言葉に聴いていきましょう。**

**聖霊によってまたイエス様の霊によって御言葉を語ることを禁じられたパウロたちは大きな挫折の中でトロアスの港町に行きつきました。そこでマケドニア人が幻に現れて、パウロたち・わたしたちはこれが神様がマケドニア人に福音を告げ知らせるために私たちを召されたことを確信してマケドニアに向けて出発することにしたのです。福音がアジアからヨーロッパに広がっていくことになるのです。**

**「わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。」と11節12節に記されています。トロアスから船でネアポリス、さらそこから徒歩でフィリピへとは結構な距離なのですが翌日とありますから、今まで進まなかった伝道旅行が一気に進んだ様子がうかがえます。**

**このフィリピの町は大きな町ですが、ユダヤ人が神様を礼拝する会堂はなかったと考えられています。それはユダヤ人が少なくて異邦人の町では会堂を持つことが難しかったからです。そこで人々は水辺で祈りの場所を持ってそこで神様に祈りをささげていたのです。パウロたちはその祈りの場所でイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えたのです。**

**するとそこにリディアという一人の女性がいました。リディアのことは「ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人」と記されています。アジア州にあるティアティラという町出身で紫布を商う人です。紫布は高級な布ですから、その布を使って商いをするリディアはかなり裕福な女性であったようです。そのリディアはなによりも神をあがめる人でした。彼女はユダヤ人ではありませんが、ユダヤ教への改宗者と考えられているのです。父なる神様を神とあがめて祈りと礼拝を大切にする女性でありました。**

**祈りの場所にいったい何人の女性が集まりパウロの語る福音を聞いていたのかはわかりませんが、主なる神様はその中でリディアに働きかけて下さったのです。**

**「主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。」と14節に記されています。リディアは自ら心の扉を開いたのではありません。主です。主なる神様がリディアの心の扉を開いて下さったのです。主なる神様がリディアの心の扉を開いて下さった結果どうなったかというと、パウロの話を注意深く聞くようになったのです。もともと彼女は祈りの場所で他の女性たちと一緒にパウロの語る福音を聞いていました。もうすでに聞いている彼女がパウロの語る福音を注意深く聞くようになったのです。「注意深く聞く」この言葉は「傾聴する」という意味の言葉です。耳を傾けてじっくりと相手の話を聴く、語ることを一言も聴き漏らすまいと耳に全神経を集中させて聴くのです。**

**日本語で「きく」には大きく分けて二つの「きく」があります。門構えに耳の「聞く」と耳編に十に目を横で心の「聴く」です。英語で言うと「hear」と「listen」の違いになるのでしょう。この二つの「きく」について私が東京神学大学在学中に牧会心理学を教えておられてもうすでに天に召された三永恭平先生がとても大切なことを教えて下さったのを覚えています。三永先生は「耳編に十の聴くには漢字の十があるでしょう。あの十はイエス様の十字架を表わしているのですよ。だから聴くはイエス様の十字架に目を向けて耳を傾けて心を込めて聴くということなのです。皆さんがこれから伝道者として教会にお仕えする中で色々な人が相談に来られます。そんな時は必ずイエス様の十字架に目を向けて耳を傾けて心を込めて聴くことが大事なのです。それは神様の声を聴くのも同じです。」そのようなことを教えて下さったことを私はいつも心に留めて聴いています。実践するのは難しいことですが、大切なこととして心に留めています。**

**主によって心を開かれたリディアは「聴いた」のです。それはイエス様の十字架を見上げたのです。熱心なユダヤ教徒のリディアにとってイエス様の十字架と復活の話を聞いても、かつての他の町のユダヤ人たちのようにパウロが語る言葉に固く心を閉ざし、石を投げつけるということをしてもおかしくありません。かつてステファノの説教を聞いていたユダヤ人の指導者たちは激しく怒り歯ぎしりをして大声で叫びながら耳を手でふさぎステファノに石を投げつけました。神を冒涜していると。ですから、熱心なユダヤ教徒のリディアがイエス・キリストが神の子であり救い主であることを語るパウロの説教を聞いても「聞く」ことはできても「聴く」ことはできなかったとしても不思議ではありません。**

**しかし、主なる神様がリディアの心を開いて下さったために彼女は「聴く」ことができるようになったのです。パウロが語る言葉が神を冒涜する言葉ではなくて、神の言葉として、福音として聴くことができるようになったのです。イエス様の十字架を見上げることができるようになったのです。「神と人との出会いを生」じたのです。イエス・キリストと出会ったのです。彼女は「イエスはキリストである」との信仰の告白へと導かれて、リディアだけでなく彼女の家族も洗礼を受けたのです。**

**そして彼女は「私が主を信じる者だとお思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と無理やりにパウロたちを家にもてなしをしたのです。「無理に」とは面白い表現ですが、何としてでもパウロたちをもてなしたい、神様への感謝の気持ちをおもてなしという形で表したい、そのような彼女の強い気持ちが伝わってきます。「旅人をもてなしなさい」（ローマ12：13）の主の言葉の通り見ず知らずの旅人であるパウロとシラスとテモテとルカを家に招待しておもてなしをするのです。**

**こうしてリディアの家はフィリピの教会の母体になったと考えられています。ヨーロッパ最初のキリスト者となったリディアとその家族の家がヨーロッパ最初の教会として神様によって立てられていくのです。神様はリディアとその家族を愛して豊かに用いて下さったのです。そしてリディアも彼女の家族も神様の愛に応えて愛の業に励んだのです。**

**「主が彼女の心を開かれた」（14節）心を開いて下さるのは主です。主なる神様が心を開いて下さるので、私たちは神の言葉を福音を聴くことができるのです。イエス様の十字架を見ることができるようになり、イエス様との出会いが生じるのです。**

**私たちの心は神様に対して閉ざしてしまっています。心の扉に鍵をかけてしっかりと扉を閉めて神様に対して心が頑なになっているのです。それは神様の言葉を「聴く」ことができないということです。リディア以外の女性たちのように「聞く」ことはできても、「聴く」ことができないのです。スーパーマーケットのBGMのように流れているだけのように聞こえるのです。いえそれだけならまだいいのかもしれません。ステファノの説教を聞いたユダヤ人たちのように固く耳をふさぎ全く聞こうとせず石を投げつけるような攻撃的な態度に出るのです。私たちはやはり自分に都合の悪いことは聞きたくないものです。聖書を通して語られる神様の言葉を自分に都合の良いように解釈して都合の悪いことや聞きたくないことは聞こえないように耳をふさぎ、心を固く閉ざしてしまうものです。**

**けれども、そんな頑なな私たちの心の扉を神様が開いて下さり神様の言葉を「聴く」ことができるようにして下さるのです。私たちが自分で開くのではありません、神様が開いて下さるのです。その場所が祈りの場所である教会です。教会において神様は私たちの頑なな心の扉を開いて下さり、神様の言葉を「聴く」ことができるようにしてくださるのです。イエス様が私たちと出会って下さり、私たちがイエス様の十字架に目を向けて耳を傾けて心を込めて神様の言葉を「聴く」ことができようになる、それが教会なのです。「主よ、お話しください。僕は聞いております。」（サムエル記上3：9）と祈り神様が語られる御言葉を一言も聞き漏らすまいと必死で祈って聞いた少年サムエルのように謙虚な姿勢で聴くことができるのです。**

**そして、教会において語られる神の言葉を聴くことで、私たちはイエス様の十字架の死によって私たちの罪が赦されていることを信じて、イエス様こそが私たちの救い主ですと信仰の告白ができるようになるのです。そしてリディアのように私たちが感謝を持って愛の業に励むことができる、それは私たちが隣人に対して心を開いて愛の業をなすことができるということなのです。**

**ですから、教会というのはイエス・キリストと私たちとの出会いの大切な場所なのです。私たちはイエス様の十字架を見上げて耳を傾けて心を込めて、謙虚な姿勢で御言葉に「聴いて」いきましょう。心で「聴く」のです。互いに愛し合い、愛の業に励んでいきましょう。**